

数らしく、戸口に立つてゐるのもある一方、二人の男はもう窓ごしに中を覗きこんでゐるのでした。

はいつて来た七人の男は、みんな伯爵の狩のお供をする勢子の面々で、手に手に分銅のついた棍棒だの、長い鞭だのをもち、腰帯には犬綱をさげてゐます。八人目のもう一人の男は、伯爵家の家令で、高々と立襟のついた長い狼の毛皮外套を着てゐます。

わたしの匿れてゐた箱は、正面の側だけ一面にこまかい格子組みになつてゐて、古い薄手のモスリンが張つてあるので、そのモスリン越しに外が覗けたのです。

ところで年よりの坊さんは、風向きの悪さに怖氣がついたのでせうか、がくがく總身をふるはしながら家令の前に立つて、しきりに十字を切つては早口な頓狂聲で、――

「いやはや、どうも皆さん、どうもはや！ 分つてゐます、分つてゐますよ、何を捜しに見えたのかは。ですがな、わしはその、伯爵閣下にたいして、なんの疚しいところもないですわい。神明に誓つて、疚しいことはありませんわい。斷じてその、ありませんわい！」

さう言ひながら十字を切るたんびに、左肩ごしに指先でもつて、わたしの閉ぢこめられてゐる時計箱をさすのです。

「もう駄目だ」とわたしは、坊さんの奇怪な振舞ひを見て觀念の眼をとちました。

家令もその合圖に氣がついて、かう言ふのです、――

「わしらはすつかり知つてるのだぞ。早くあの時計の鍵を出すがいい。」

すると坊さんはまた片手を振りながら、――

「いやはや皆さん、どうもはや！ お赦しなされ、御免なされ。その鍵をどこへ仕舞つたものやら、とんと失念しましたわい。ほんとにその、失念も失念、とんと忘れましたわい。」

さう言ひながら、残る片手でしきりにポケットの上を撫でるのです。

家令はこの謎にも感づいて、鍵を坊さんのポケットから取りだすと、わたしの戸をあけました。

「出てくるんだ」と言ひます、――「この片割れめが。かうなりや相手の男は、自分から名乗つて出ようさ。」

いかにもアルカーシャは、ぬつと姿を現はしました。坊さんの掛ぶとんを床へかなぐり捨てて、すつくとそこへ立つたのです。

「いや、かうなつちやあもう」と言ふのです、――「萬事おしまひだ。お前さんたちの勝だよ。さつさとおれを連れてつて、お仕置きになり何になりするがいいや。だがね、この女にや何一つ罪はねえぜ。おれが無理矢理かどはかしたんだからな。」

そして坊さんの方へくると向き直ると、したことはたつた一つ、その顔へベッと唾を吐きかけただけでした。

坊さんが言ふには、――

「いやどうも皆さん、これは一たい何事ですか。聖職と信仰とにたいする何たる侮辱でせうかな？　これは一つ伯爵閣下に御報告ねがひたいものですな。」

家令はそれに答へて、――

「いや、案ずることはない。それもこれも、こいつの身に報いるのだからな」と言ふと、わたしたち二人を引いて行けと下知しました。

わたしたち一行は、三臺の櫓に分れて乗りました。先頭の櫓には縛りあげられたアルカーチイが勢子にかこまれて乗り、わたしも同様の嚴重な見張りのもとに殿りの櫓に乗り、まん中の櫓には餘つた連中が乗つたのです。

途で行きあふ村びとたちは、脇へよけてくれました。婚禮かと思つたのかも知れません。

歸りはあつと思ふひまもないほどの早さでした。伯爵のお屋敷へ乗り入れた時には、アルカーチイに乗せた櫓はもう影も形も見えず、わたしは早速いつもの席へ坐らされて、たてつづけの糾問せめでした。一體どれほどの時間アルカーチイと二人つきりであたか、といふのです。

わたしは誰に向つても、

「いいえ、ちつとも！」と返事をしました。

さてそこで、わたしは背負つて生まれたもの、それも可愛さ餘つて今では憎らしくて堪らぬ人と一緒に背負つて生まれたその運命は、しよせん逃れるすべもなかつたのです。で、わたしが小部屋へ歸つてきて、わが身の不運を泣いて泣いて泣きつくしてしまはうと、頭を枕に埋めたとたんに、床の下から怖ろしい呻き聲が聞えて來たのでした。

芝居小屋の間どりは、こんなふうになつてゐました。――その木造の建物のなかで、わたしたち女の子は二階に住處をあてがはれ、すぐその下は天井の高い大きな部屋で、わたしたちの歌や踊りの稽古場になつてゐたのですが、その物音は上の部屋へ筒抜けに聞えるのでした。さだめし地獄の大王サタンが入れ智慧したものに違ひありません――無慈悲非道なお仕置役たちがあのアルカーチイを責めさいなむのが、ほかならぬわたしの部屋の真下なのですからね。……

あれはあの人が責められてゐるのだと、とつさに感づいたわたしは、むつくり跳ね起きさま

……現場へ駆けつけよう……ドアに體當りをしましたが……しつかり錠がおりてゐます。……どうしようといふのか、自分でも分りません……ばつたり倒れると、床べたでは尙更よく聞えます。しかも小刀一挺、釘一本——胸を突かうにも喉を突かうにも、死ぬ手だては何一つないのです。わたしは自分の垂髪をぐいと握つて、それで縊れようと思いました。……喉へ捲きつけて、ぐいぐい締めあげてゆくと、だんだん耳に音が聞えるだけになつて、眼のなかにぐるぐる輪が幾つも廻りだし、やがて氣が遠くなつてしまひました。……

やがてわたしがそろそろ正氣に返りはじめたのは、見たこともない場所で、廣々と明るい小屋のなかでした。……おまけにそこには仔牛がゐるのです……なん匹もなん匹も、十匹あまりもゐるのです。——それがみんな可愛らしい仔牛でね、そばへ寄つて來ては、ひやりとする唇で手をなめるんですよ。きつとお母さんのおっぱいでも吸ふ氣でゐるのでせう。……實はわたしが目を覺ましたのも、くすぐつたくなつたからなのでした。……あたりをぐるりと見廻しながら、おやどこかしらと思ひました。見てゐると、女の人が一人はいつて來ました。脊の高い中婆さんで、縞のはいつた空色の麻服にすつぽり身をくるみ、おなじく縞入りの麻のプラトートを頭にかぶつて、親切さうな顔をしてゐます。

女の人は、わたしが正氣づいたのを見てとると、慰めの言葉をかけてくれたり、今わたしのあ

るのはやはり伯爵のお屋敷うちにある仔牛小舎だと、教へてくれたりしました。……それはね、ほらあの邊にあつたのですよ——と、リニボーファイ・オニーンシモヴナはここで註釋を入れて、半ば崩れ落ちてゐる灰色の垣根の一ばん向ふの隅の方角を、片手でさし示すのだつた。

彼女が牛小屋なんかに入れられたのは、ひよつとすると氣狂ひみたいなものになつたのではあるまいかと疑はれたからだつた。そんなふうには畜生じみて來た人間は、牛小屋へ入れて試して見ることになつてゐた。といふのは、牛飼ひといふものは元來が年の入つた、物に動じない連中なので、精神病の「鑑定」には打つてつけだとされてゐたからである。

リニボーファイ・オニーンシモヴナが正氣に返つた小舎を受持つてゐた縞服の婆さんは、とても親切な女で、ドロシードといふ名前だつた。

——そのお婆さんは、夕方の身仕舞ひをしまふとね（と、乳母は物語をつづけた——）、自分で新しいカラス麥の藁でもつて、わたしの寢床を作つてくれました。それをまるで羽根ぶとのやうに、きんわり敷いてくれると、こんなことを言ひだしたのです。——

「なあ娘さんや、今は何も包みかくさず、あんたに話してあげようね。あんたのことはまああんなのこととしてさ、このわたしだつてやつぱりお前さんと同じやうに、生まれてからこの日まで何も縞の着物一つで押し通したわけでもないのさ。わたしだつてわたしなりに、ほかの暮らしを見も聞きもしたつて、桑原々々、今さら思ひ出したところで始まらないよ。ただあんたに言つておきたいのはね、かうして牛部屋なんぞへ送られて来ても、決して自棄なんか起してはいけぬよ。送られて来た方が結句ましなのさ。ただね、この怖ろしい水筒にだけは氣をつけなされよ……」

さう言ふと、首に巻いたプラトックの中から、白っぽいガラスの小壘を出して見せてくれました。

わたしが、

「それは何ですか？」と聞くと、

んは、

「これがその怖ろしい水筒なのよ。なかには憂さを忘れる毒がはいつてゐるのさ」と答へます。わたしがそこで、

「わたしにもその憂さを忘れる毒を下さい。何もかも忘れてしまひたいのです」と言ふと、

婆さんが言ふには、――

「飲むんぢやないよ、これは火酒ウイスキーなのさ。いつぞやわたしは、自分で自分の締めくくりがつかなくなつて、飲んぢまつたのよ……親切な人がくれたものでね。……今ちやもう我慢がならない――飲まずにやゐられなくなつちまつたのさ。だがね、お前さんは飲まずにゐられるうちは飲まないがいいよ。まあわたしがかうして、ちびりちびりやると云つて、咎めだてはしないでおくれね――わたしは辛くつてならないんだからね。けれどお前さんには、まだまだこの世に慰めがあるらうといふものさ。だつてあの人は、神様のお計らひで、魔手まてをのがれたんだものねえ！……」わたしは思はず、「死んだのだ！」と叫ぶと、とつさに自分の髪の毛をつかみましたが、見るとその髪が、わたしの髪の毛ではない、――白髪なんです。……なんてことだらう！

すると婆さんが、かう言ひました、――

「しつかりおし、しつかりおし。お前さんの髪は、あの小部屋で、首に巻きつけた垂髪おさげを人が解いてくれたその時から、もう眞白だつたんだよ。けれどあの人は生きてるよ。しかももう、責めも苛なみもされない境涯なんだよ。伯爵はあの人に、かいびやく以来の恩典をほどこしたんだよ、――その話はその話で、夜が更けてからすつかりして上げるがね、まあ少し嘗めさせておくれよ。もうちつとやらないことにや……胸むねんところが焼けつくやうで、とんとやりきれないの

さ。」

さう言ひながら、ちびりちびりやるうちに、ぐつすり婆さんは寝てしまひました。

やがて夜が更けて、みんな寝しづまつた頃、ドロシーダ小母さんはこつそり起きあがつて、燭もとぼさずに枕もとへ寄つて來ました。見るとまたもや例の水筒を一ぱいやつてから、またそれを匿すと、小聲でわたしに問ひかけるのです、――

「氣の毒な娘さん、寝てるかい？」

わたしが、

「起きてますわ」と答へます。

そこで小母さんが藁床のそばへやつて來て、話してくれたところによると、伯爵は一通りの窮命がすむと、アルカーヂイを呼び寄せて、かう申し渡したのださうです、――

「本來ならお前は、兼々わしが言つておいた通りの目に逢はねばならんところなのだが、日ごろの寵愛に免じて、今度だけは特に寛大な處置をしてとらせる。わしはお前を、身代金なしで明日兵隊に出してやる。しかもお前が、れつきとした伯爵でもあり士族でもあるあの弟のやつピストルに、びくともしなかつたあの剛膽さに賞でて、名譽ある前途を開いてやることにしよう。わしとしては、お前が示した天晴れな根性骨より低い地位に、お前をつけたいとは思はんのだ。

わしは手紙を書いて、お前をすぐさま戰場へ出すやうに言つてやらう。それも一兵卒としてではなくて、聯隊の軍曹として出陣するやうにな。まあ立派にお前の勇氣をふるつて見せるがいい。この上はもうお前はわしの家來ではなくて、あつばれ帝の臣下なのだぞ。」

「だからね」と、縞服の婆さんは言ふのでした、――「今ちやあの人には安樂になつて、びくびくするものは何一つないのさ。勝手にならないことは只一つ、戦死といふことだけで、ごぜん様の御意なんかもうありはしないのさ。」

わたしも成程その通りだと思つて、それから三年の間といふもの、毎晩々々アルカーヂイ・イリーチが戦さをしてゐる有様を、ただそれだけを夢に見つづけました。

さうして三年の年月は流れましたが、そのあひだちゆうわたしは神様の御加護で、二度とふたたび芝居へは戻らずに濟み、引續きその仔牛小屋のなかで、ドロシーダ小母さんの組の者として暮らしたのです。それは實にいい暮らしでした。わたしはこの小母さんを氣の毒に思つて、夜更けなど小母さんがあんまり酔つばらつてゐないやうな時には、その思ひ出話をきくのが好きでしたからね。小母さんは未だに、先代の伯爵が斬り殺された時のことを覚えてゐました。發頭人は從僕頭でしたが、――とにかくみんなもうこのうへ一刻も、沒義道な主人の亂行が我慢ならなくなつたのです。とはいへわたしは、まだ一滴の酒も飲み習はず、ドロシーダ小母さんのため色ん

な用事をいそいそと勤めたものでした。仔牛たちがまるでわが子のやうな気がしたのです。仔牛たちにすつかり情が移つてしまつて、その中のどれかが肉が乗りきつて、食卓にのぼせられるため屠殺場へ曳かれて行く時など、思はずその後姿に十字を切つて、三日間も泣けて泣けてならないくらゐでした。わたしはもう舞臺に立てる身ではありませんでした。脚がぐらぐらして、よく歩けなくなつてゐたからです。以前はわたしの足どりは世にも軽やかなものでしたが、あの日アルカーヂイが氣絶したわたしを寒氣の中へ連れ出してからといふもの、きつと脚が冷えこんだのでせう、爪先にすつかり力が失せて、とても踊りどころの段ではありませんでした。結局わたしも、ドロシーダと同じやうな縞服の女になつて行つたのです。そんな鬱陶しいその日その日が、その先どこまで続くものやら見當もつかなくなつたのですが、そのうち突然、ある日の夕方じぶんの小屋にゐた時のことです、——日が沈みかけてゐましたが、わたしが窓際で紡ぎ車をほぐしてゐると、いきなり小石が一つその窓から飛びこんで來たのです。石はすつかり紙にくるんでありました。

わたしはそこいらを見廻し、窓の外まで覗いて見ましたが、誰もゐません。

「これはきつと、誰かが垣根の外からわざと投げこんだのが、狙ひがそれて、この小屋へ飛びこんだのだらう」とは思ひましたが、なほも胸の中で、「あの紙をひろげて見たものか、どうかしら？ どうやら擴げて見た方がよささうだ。きつと何か書いてあるにちがひないもの。ひよつとするとあれば、誰かにとつて大事なことも知れない。讀めばそのくらゐの察しはつくし、何か祕密のことだつたらそのまま胸の中にたたんで、書附はまた石をくるんで同じやうに名宛て先の人のところへ抛りこんでやればいい。」

ひろげて讀みだした途端に、わたしはわが眼が信じられませんでした。……

かう書いてあるのです、——

『二世を誓つたわがリニーバよ！ ぼくは方々轉戦して陛下に御奉公し、一再ならずわが血を流した。おかげで將校に昇進し、立派な肩書がついた。今度ぼくは休暇をもらつて傷の療治に歸つて來て、プシカーリ村のさる旅籠屋の亭主の世話になつてゐる。明日になつたら勳章や十字章

をぶらさけて伯爵に會ひにゆくが、そのとき療治の費用にもらつた五百ルーブリの金を残らず持参して、それを身のしろ金にあんたを請け出さしてもらひ、いとも高き造物主の祭壇のみ前で婚禮をしたいと思ふ。』

——その先には（とリニボーフィ・オニシモヴナは、こみ上げてくる感情を抑へながら、言葉をつづけた——）、まだこんなことも書いてありました。『あんたがこれまでどんな災難に逢つたにしろ、たとへどんな憂目を見たにしろ、ぼくはそれを受難と思つて、決して罪科とも淺慮さとも思はず、何ごととも神のみ心にお任せして、あんたをひたすら崇め敬ふつもりだ。』そして、『アルカーチイ・イリイチ』と署名してありました。

リニボーフィ・オニシモヴナは、その手紙をすぐさまベチカの搔取り口で燃やして、餘人はもとより當の縞服の婆さんにさへ口外せずに、夜つびて神に祈りをささげた。それもわが身のことは一さい口にしないで、ただもう男のために祈りに祈つた。といふのは、「なるほどあの人の手紙には、もうちやんと士官になつて、十字章ももらひ名譽の負傷もある身だと書いてはありましたが、そのため伯爵のもてなしぶりが昔と違はうなどは、とても考へられなかつた」からであつた。

手みじかに言へばつまり、相變らず彼が打擲されはしまいかと案じたわけである。

あくる朝はやく、リニボーフィ・オニシモヴナは仔牛を日なたへ出して、小さな鹽に入れたパン皮や乳で養ひはじめたが、その時とつぜん、異様な物音がきこえた。それはお屋敷の奉公人たちが、「自由に」垣根のそとを何處かへ急いで行くらしく、どんどん駆けだしながら、何やら早口でわめきかはしてゐるのだつた。

——一體なにを話してゐるのやら（と、乳母は語るのだつた——）、わたしには一言も聞きとれませんでしたが、その一言々々がまるで首になつて、この胸に突きささる思ひがしましたよ。その時ちようど、肥運びのフィリップが門内へ乗りこんで來ましたので、わたしは渡りに舟とばかり、——

「ねえフィーリニシカ、ひよつとしてお前さん知らないかい？ あの人たちは何しに行くんだい、何を珍らしさうに話し合つてゐるんだい？」

と聞きますと、

「あれはなあ」といふ返事です。——「プシカリー村でな、旅籠屋の亭主が眞夜中ぐつすり寝こ

んでる士官を刺し殺したとかいふんで、それを見物に行くのさ。刺すも刺したり、喉笛ま一文字に切つてのけてな、大枚五百兩といふ金をふんだくつたとよ。もう捕まつたが、總身にべつとり返り血を浴びてな、金もちやんと持つてゐたさうだよ。」

その話を聞くなり、わたしはへたへたと腰が抜けてしまひました。

まつたくその通りだつたのです。その亭主はアルカーヂイ・イリイチを刺し殺したのでした……そしてあの人は、それこの、ほかでもない今わたしたちの腰掛けてゐるこのお墓の中に、葬られたのですよ。……ええ、さうですとも。あの人は未だにわたしたちの下に、この塚の下に寝てゐるのですよ。……坊つちやんはさぞかし、わたしが散歩といへば必らずここへ来るのを、不思議に思ひなすつたでせうね。……わたしは二度とふたたび、あすこを（と、陰氣な灰色をした廢墟をゆびさして——）この眼で見たいとは思ひません。ただ残る望みといへばもう、ここであうしてあの人のそばに一とき坐つて、そして……一しづく、ほんの一しづく、あの人の後生のため供養することだけなのですもの。……

そこでリニボーファイ・オニシモヴナは言葉を切ると、これで自分の話も大團圓まで漕ぎつけたと思つたのだらう、ポケットから小さな壘をとり出して、「供養」だか「一ばい」だかをちびりちびりやつたが、わたしは追つかけてかう尋ねた、——

「けど、その名高いカモジの美術家をここへ葬つたのは、一たい誰だつたの？」

「縣知事さんですよ、坊つちやん。ほかならぬ縣知事さんが、自身でお葬らひに來たんですよ。當り前ですとも！ 士官さんですものね、——おミサの時も、補祭さんや神父さんは『貴族』アルカーヂイと呼び上げなすつたし、やがてお棺を吊りおろす時には、兵隊が鐵砲を空へ向けてカラ弾を打つたものですよ。またその旅籠屋の亭主には、やがて一年ほどしてから、お仕置き役人がイリインカの廣場で鞭打ちの刑を執行しました。その男はアルカーヂイ・イリイチを殺めた報いで四十三の鞭を受けましたが、とうとう堪へとほして——生きてゐたので、焼印をおされて懲役にやられましたよ。お屋敷の男衆で手のすいてゐた人たちは、みんな見物に行きましたが、あの非道な先代の伯爵を殺めた下手人のお仕置きのことを覚えてゐる年寄り連中は、その四十三の鞭といふのはまだしも少ない方だと言つてゐました。それはアルカーシャが平民の出だつたからで、前の下手人たちは相手が伯爵だといふので、百一本の鞭をくつたださうです。掟によると、偶數はいけないことになつてゐて、鞭の數はかならず奇數でなければいけないのです

よ。その時はわざわざトゥーラからお仕置き役人を連れて来て、いざ始める前にラム酒を三杯も引つけさせたさうです。そこで初めの百本はただ一寸刻み五分だめしのつもりでやつて置いて、やがて最後の百一本目を思ひつきりピシリとやつたものだから、脊骨が碎けてしまつたさうですよ。板から引つぱり起された時には、もう息を引きとりかけてゐたのを、……それからコモにぐるんで牢屋へ送らうとしたのですが、途中で死んでしまつたのですよ。ところがそのトゥーラのお仕置き役人は、人の噂によると、『やい、もつと誰か叩かせろ——オリョールちゆうの奴らを片つ端からぶつ殺してやるぞ』とどなり散らしてゐたさうですよ。」

「でも、ばあやさんは、その人のお葬らひに行つたの、行かなかつたの？」
と聞くと、

「行きましたとも。みんなして行つたのですよ。伯爵がね、芝居者をのこらず連れて行つて、うちの者のなかからそんな立派な奴の出たことを、よく見させて置けと下知したのですからね。」

「それで、お別れができたわけなの？」

「できませんでしたもさ！ みんなお格のそばへ行つて、お別れをしたのですよ。そしてわたしは……さう、あの人はすつかり面變りがして、これがあの人かとびつくりするほどでした。瘦せかけて、まつ青な顔をして——無理はありません、血がすつかり出盡してしまつたのですもの。何

しろあの人刺し殺されたのは、ちようど眞夜中のことでしたからねえ。……一たいどれほどの血をあの方は流したことやら……」

そこで乳母は口をつぐんで、考へこんでしまつた。

「で、ばあやさんは」と、わたしが開く、——「それからどうしたの？」

乳母はハツとわれに返つたらしく、片手で額を一撫でして、「初めのうちは、さつぱり覚えがないのですよ、——どうして家まで歸つたものかね、……まあみんなと一緒にしたから、——きつと誰かが肩をすけてくれたのでせうよ。……やがてその晩、ドロシーダ・ベトロウナが言ふには、

——ねえ、それちやいけないよ……まんじりともしないで、まるで石みたいになつて臥てゐるなんてさ。それちや身が持たないよ——お泣き、思ひつきり泣いて泣いて、泣きつくしておしまひ。」

と言はれてわたしは、

——それが駄目なのよ、小母さん……胸のなかがるで炭火のやうに、かつかと燃えるんですもの、消さうたつて消せないわ。」

すると小母さんは、

——まあさうなのかい。ちやもういよいよ、この水筒の御厄介になるんだね。」

さう言つて例の壺から一杯ついでくれて、

——「いつぞやは、これをやるんぢやないよと言つて、お前さんに禁めだてをしたわたしだけれど、もうかうなつたら仕方がない。まあ一杯やつて、その炭火を消すがいいさね。」

わたしが「いやですわ」と言ふと、小母さんは、

——「お馬鹿さんだねえ。誰が初めから好き好んで、こんなものを飲むものかね。そりやこれはなんとも言へずがいさ。だが歎きの毒は、これよりもつとにがいんだよ。そこでこの毒の汁を炭火にぶつけてごらん——たちまち消えてしまふから妙さ。ぐつとおやり、早くぐつとおやりな！」

わたしは忽ち、その壺を空つぼにしてしまひました。とても厭な味だつたが、でもそれがないと眠れなかつたのです。その次の晩もやつぱり飲んで……それがとうとう習ひ性になつて……今ぢやもうそれがないと寝つけないのですよ。そこでかうして小つちやな水筒を手に入れて、お酒をちよよいちよい買つてくるんですよ。……でも坊つちやんはいい子だから、ママさんに言ひつけなんかしませんわね。しもの者に、煮湯を吞ませるんぢやありませんよ。しもの者は目にかけてやらなければいけませんよ。だつてもしもの者は、みんな受難者なんですよのねえ。

今日もこれから歸りしなに、わたしはあの居酒屋の角のところで、小窓をトントンと叩くんですよ。……まさか自分であの店へはいるわけには行きませんか。この空つぼの水筒を窓から入れてやつて、また一杯にしてみらふですよ。」

子供どころにも乳母の氣持が身にしみて、わたしはどんなことがあつても決してその『水筒』のことは口外しないと、かたく約束した。

「ありがたうよ、坊つちやん、——言ひつけないで下さいね。ばあやはこれがないと、生きて行けないのですからね。」

今でもかうして目をつぶると、わたしはありありとあの乳母の姿を目に見、その聲を耳に聞く思ひがするのである。夜がふけて家ちゆうが寝しづまると、毎晩のやうに乳母は、骨の節一つ鳴らさぬやうに用心しいしい、そつと寢床に半身をおこす。しばらくじつと聴耳を立ててから、やがて起きだすと、例の長細いリニーマチの脚を忍ばせて、小窓の方へ行く。……やや暫したたずんで、あたりをうかがひ、またも聴耳をたてる。寢部屋からママが出て來はしまいかと案じるのである。それから、やをら例の『水筒』の頸をカチリと齒に當てると、呼吸をはかつて「一杯やる」のであつた。ぐびり、またぐびり、またもう一ぺん。……そんなふう炭火をしめして、アルカーシャの追善をすると、ふたたび寢床へかへつてゆく。——さうして毛布の下へもぐりこむ

と、まもなく静かに、じつに静かに、フュー・フュー、フュー・フュー、フュー・フューと寢息を立てはじめる。そしてぐつすり寢入つてしまふのだ！

何が怖ろしいかいつて、これほど凄惨な、胸の底まで搔きむしられるやうな追善供養を、わたしはこの年になるまで見たことがない。

あとがき

ニコライ・セミョーノヴィチ・レスコーフ (N. S. Leskov) は、一八三一年に生まれ同九五年に死んだロシアの小説家である。

その生歿の年からも明らかなやうに、彼はトゥルゲーネフよりは十三の年少、ドストイェーフスキイよりは十の年少であり、レフ・トルストイに比べれば僅か三つの年少にしか過ぎない。したがつて、その創作活動の時期は、當然これらの三巨匠と同じく十九世紀後半にぞくしてゐたのみならず、一般讀書界の人氣から言へば、むしろこの三巨匠をしのぐものすらあつたのである。現にドストイェーフスキイにしろトルストイにしろ、いづれもレスコーフの作品を一方ならず愛讀してゐたらしいし、くだつてチェーホフのやうな作家までが、最も愛讀したのは決して上に擧げた三巨匠のうち誰でもなくて、却つてレスコーフその人なのであつた。

本國ではそれほどまでに愛され親しまれてゐたレスコーフではあるが、その名は不思議なほど外國には聞えてゐない。それには勿論いろいろと原因はあらうが、その有力な理由の一つは、なんとにしても彼の文體にあまりにも民族的な特徴が色濃く、且つ奔放自在の妙をきはめてゐるた

め、外國語に移しにくいといふ事實でなければならぬ。

わが國は周知のやうに、ロシア文學の移植紹介にかけては恐らく世界でも有数の國からである。にもかかはらず、かなり最近までレスコーフの名が巷間に傳へられなかつたことについては、右に指摘した理由のほかにもう一つ、彼の作品には人生觀上の乃至は政治的な意味における露骨な主義主張が、あまり際だつて見受けられないといふことを數ふべきであらう。これは一方から見ればレスコーフの文學が大人の文學だといふことになるだらうし、他方から見ればわが國の文學思想の後進性を物語る否應ない證據だとも考へられるだらう。ともあれレスコーフの作品の邦語への移植は、僅かに一九四三年に至つて、長篇小説『僧院の人びと』が新世界文學全集の一冊として、わたくしの蕪譯で上梓されたのに始まり、ついで終戦後の一九四八年に、中篇小説『魅せられたる旅人』が米川正夫氏の譯によつて世に送られたにとどまつてゐる。したがつてここに『邪戀』と題した短篇集は、この作家をわが國に紹介する三度目の試みにあたるわけである。

レスコーフが生まれたのは、トゥルゲーネフの故郷として名高いオリョール縣である。祖父は田舎司祭であり、祖母は商家の出であつた。父は並の官吏で、年功によつて一代貴族に列せられたにすぎず、世襲貴族の血はわづかに母によつて傳へられてゐるとどまる。このやうにしてレ

スコーフの血脈には互ひに相異なる四つの身分が混り合つてをり、それがまたおのづから彼の作品の世界にも屈折投射して複雑な様相を呈せしめてゐることは、一應注意しておいてよい事からであらう。

かてて加へてレスコーフの人生行路もまた、その複合的な血統におとらず、多岐と數奇をきはめてゐた。幼いころ父を失つた彼は、十六のとき母とも死別して天涯の孤兒になつたが、それより先オリョールの領地も有名な大火のため焼け失せて、彼は少年の頃からつぶさに貧困と孤獨の味をなめなければならなかつた。さうした生ひ立ちの少年として、初期の教育がまづ乳母の手で行なはれたことは想像に難くない。この集に收めた『かもじの美術家』(Тупейны художник) は、明らかに自傳的な要素を多分にふくんでゐる作品だが、その中に出てくるリュボーフィ・オニシモヴナのやうな乳母の口から、幼いレスコーフは農奴制度に押しひしがれた人々の悲惨の數々を聞かされて、ロシアの現實への眼を早くから開かれたに相違ないのである。

このやうに現實にたいして頗る早熟だつた少年が、やがて中學に入つて、さまざまな文學書の濫讀癖に陥つたことも極めて自然であつた。當時マサーリスキイといふ歴史小説家がゐた。『ドシ・キホーテ』の最初の露譯者としても有名な人物だが、この人の姪にジノーヴィエヴァ夫人といふ人があつて、非常な藏書家であつた。少年レスコーフはこの夫人の家に出入りを許されて

ゐて、十五歳の頃までには夫人の蔵書を残らず讀破してゐたと傳へられてゐる。やがて彼の作家としての生涯を縦に貫ぬくことになつた逞ましい物語趣味は、遠くこの幼少年期の自己教育にその源をさぐる事が出来る。

やがて孤兒レスコーフは中學を退いて、暫くオリョール市の裁判所の吏員をしたのち、南方の舊都キエフにあつた叔母ペラゲーヤの再縁先に引取られ、そこでも役所勤めをすることになる。この叔母の二度目の良人といふのはスコットといふ英國人で、熱心なクエーカー宗徒であり、またロシアの大地主貴族の莊園の管理人をつとめてゐる人物であつた。この町でレスコーフは大學生の群と交はり、當時流行のドイツ觀念哲學の洗禮を一應は受けることになる。しかし餘りにも早く現實への眼を開かれてゐたレスコーフは、もとより大してそれらの理論の影響をかうむるはずがなかつた。それよりも、彼がスコット一家から受けた影響の方が遙かに重大であつた。

いつたいクエーカー宗の特色は、僧侶や典禮からキリスト教を清めて、これを原始の狀態に戻さうとするところであり、頗るイギリス的なヒニーマニズムの香氣が高い。奴隸制度の廢止といひ、女權の尊重といひ、反戰主義といひ、弱小民族の保護といひ、その主張するところは悉く健全な實踐思想に貫ぬかれてゐて、大方のユートピア思想のやうに大地から浮きあがることがない。レスコーフの血管のなかには、上に見たやうに僧侶の血が流れてゐる。と同時に商人階級の現實

的な血も流れてもゐれば、また辛酸多き幼少時代の體驗から來た拭ふべからざる現實精神もある。さうした雑多な素地に一應の統一と完成をもたらししたものとして、スコット一家の清教徒的な雰圍氣の演じた役割は決して過小評價してはならない。

もう一つ彼がスコット氏から受けた大きな恩恵は、二十代の半ば頃に、その管理人の事務を手傳ふことになつたことであつた。莊園管理の事務は、もとより多大の實際的經驗を必要とするものだが、それと同時に諸方に散在する莊園のあひだを、絶えず旅行して廻ることを必須とする。これがレスコーフの只でさへ豊富なロシア現實の見聞を、いやが上にも増し擴げることになつたのは當然である。

あらまし以上が、作家レスコーフの精神の形成であつた。そこには一種獨特な現實的ヒニーマニストが誕生することになつたのである。彼の創作活動は、一八六〇年代から九〇年代に及ぶ約三十年間を占めてゐるが、その間たえて所謂ナロードニキの運動と相交渉することなく、却つてこれと反撥し合ふことが多かつたといふ理由は、敍上のことから容易にうなづけることであらう。その一方、彼とトルストイとの間に成立してゐた文學的友情も、たやすく説明がつくだらう。ゴリーキイの回想によると、トルストイはレスコーフの作品を、ドストイエーフスキイより

も上位に置いてゐたといふ。これはあなたがちレスコーフの物語作家としての優秀性を買つたばかりではあるまい。二人の獨特なヒューマニスト、二人の頑強な非國教徒のあひだの、ごく自然な好意關係であつたに違ひないのだ。レスコーフも晩年ちかく、かなりトルストイの無抵抗哲學に影響された時期があつた。しかし彼は間もなくそれを脱して、却つて烈しい反噬を示しさへしてゐる。レスコーフの孤獨な運命が、そこにも覗いてゐると言つていい。

全集は三十六卷から成るといへば、ロシアでも屈指の多作家の部類にぞくすることが分らうが、その作品が量的にも頗る龐大な長篇小説から、手ごろな中篇小説、線のきつかりした短篇小説に至るまで、とりどりに特色を發揮してゐると同様に、その作柄や主題は質的にも頗る變化に富んでゐる。初期には政治小説めいた長篇を書いて、空想的ないはゆる進歩派陣營の内幕をあばいたりして、いたくその派の人々の憤激を買つたものだつたが、彼の本領はもとよりさうした方面にあつたのではない。彼の創作衝動の最も美しい流露をゆるした主題を大別すれば、およそ二つになるであらう。その一つは僧侶の生活あるひは信徒の生活を扱つた一聯の大がかりな作品で、これが彼の得意の壇場であつたことについては、もはや蛇足を加へる必要はないと思ふ。現に批評家レルネルの如きは、十九世紀のロシア文學を通じて堂々宗教上の見解を吐露した作家として、トルストイ、ドストイエーフスキイと並んでレスコーフの名を擧げてゐるほどである。

『僧院の人びと』(1872) はなかんづく人口に膾炙した作品であり、そのほか中篇『封印された天使』(1874)、または七〇年代の末から八〇年代の初へかけて成つた『僧正生活片々』など、一々枚舉に堪へぬほどである。それらの作品を通じて、レスコーフは或ひは高潔な義人型の老僧の不遇に泣き、或ひは信仰の奇蹟を浮彫りにし、或ひは愛他の精神美をたたへ、或ひは教會の腐敗に破邪のメスをふるひなどして、主題的にも變幻自在な鬼才ぶりを發揮してゐるのであるが、しかもその犀利な現實觀察眼は作の隅々にまで行き渡つて、いささかの神祕化の跡、理想化の跡をもとどめてゐない。かと言つてまた、凡庸な人生派・現實派の作家に見られるやうなトリヴィアリズムないし日常茶飯主義からも遠く離れてゐることもまた彼の作風の大きな特色であつて、ほとんど古代ギリシヤを思はせるやうな朗々たる哄笑もあれば、浪漫派の作家のお株を奪ふ底の奔放な幻想もあり、線の太い殆ど古典的なまでに逞ましい筋の變轉もある。

そこにレスコーフの、ロシア作家として恐らくゴーゴリ以外には匹儔を見まいと思はれるほどの野放圖な現實的「幻想性」が見られる。さうした特色が最もよく現はれてゐるのは、彼の第二の作品群である所謂「世相物」なのであつた。そこでわれわれの前に立つレスコーフは、フランスの自然派作家も三舍を避けようと思はれるほどの無情刻薄な現實追求家なのであるが、それと同時にロシア民族の古い傳統のうちに眠つてゐたりズミカルな俗語や方言の類を縦横に使ひこな

す説話體の名手であり、且つ心憎いまでに話術の妙を心得た端倪すべからざる物語作家でもある。読む者をして息もつがせぬほどの變轉自在の妙をきはめながら、しかも深く現實意識に浸潤され、のみならず根づよいヒニーマニズムの精神の貫ぬかれた彼の作風のもつ滋味を、のこりなく味はひつくすことは、おそらく原語の味をも深みをも幅をもそのままに受用することのできるロシアの民衆にのみ許された特權ではあるまいかと思はれるほどである。

この方面でのレスコーフの代表作としては、先にふれた中篇小説『魅せられたる旅人』があり、また彼のスタイリストとしての一面の極端に發揮された一例としては、『トゥラの左利きと銅の蚤の話』といふ奇想縦横な好短篇がある。

この集に收めた『邪戀』(1866)は、原題を『ムツェンスク郡のマクベス夫人』(Leidi Makbet Mcenskovo yezda)とすひ、おなじく初期の作である『したたか女』(Voitel'nica)とならんで、レスコーフの最も徹底した自然主義的作風を代表する傑作である。『したたか女』は、ペテルブルグで表向きはレースなどを商なひながら、かげでこつそり男女の仲を取持つ悪婆の生態を描き出した作品で、しかもこの婆さんが決して信仰心を失つてはをらず、却つて善徳をほどこしたつもりでゐるといふところに、人間性の深淵への作者の不氣味な眼光がきらめいてゐると言へるだら

う。『邪戀』はさながらこの主題を裏返しにしたものの如く、女性の情慾といふものの凄惨なあり方に眞正面から取組んだ酷烈むさんな作品であつて、このやうな主題をここまでひたむきに追求し了せた小説は、世界の文學史上にもあまり類例を見ないであらう。全篇ことごとく甘美な地上夢と冷たい死との怪しい舞踏と云つても過言ではないが、しかも一字一句として現實を遊離してはゐない。怖るべき作家レスコーフの面目は、この中篇にも躍如としてゐるのである。

同じやうな現實の緊迫感に充滿しながら、そして同じく救ひのない悲劇的なシチニエーションに終始しながら、『かもじの美術家』には一條の光明が力づくよく射してゐることに讀者は氣づかれるであらう。この作品に自傳的な色合ひの濃いことは前にも一言したが、ここには農奴制度の廢止によつて觸發されたヒニーマニズムの讃歌が、つつましかな低音部を奏でてゐるのである。しかもその作風は『邪戀』に比べて一そう自由な説話體に近づいてをり、レスコーフの巧みな話術の眞骨頂をより端的に窺はせるであらう。この作品の書かれた年代を譯者は明らかにしないが、おそらく中期の圓熟の筆に成るものであらうか。

『眞珠の頸飾り』(Zhenchuzhnoe ozherelje)は、一八八六年に上梓された『クリスマス物語集』のなかの一篇で、かうなるともう純然たる話術上の至藝の一標本と言つてもよいであらう。ごく單純な云はば小啻に類するものでありながら、あらかじめその主題や話の性質などに嚴しい制限

を加へなどして、しかも淡々たる筋の運びのうちに最大限の變化を宿しつつ、つひにまんまと思ふ蓋へ落しこむ。まことに小面にくいほどである。けだし天成のストリー・テラーとしてのレスコーフの輕妙な筆の冴えを見るに足る佳篇であらう。

最後にわたくしは、この譯本で使つた文體について一言を費やしておきたい。率直に言つてわたくしは、説話體の作品の移植しがたさを、今度ほど身にしみて覺えたことはない。ドイツのロシア文學研究家エリヤスベルクはレスコーフを評して、「おそらく彼はあらゆるロシア作家のうちで最もロシア的な作家であつた。それはドストイェーフスキイ以上でさへあつた。彼はロシアの大地にしつかり根をおろしてゐるのだ。外國人はレスコーフの短篇を讀んだ方が、ゴーゴリやドストイェーフスキイやトルストイのものを讀むより、遙かによくロシアの素顔を知ることができるといふ意味のことを述べてゐる。これはまさに名言であるが、ひるがへつて思へば、素顔はまた素直な言葉で語られてこそ初めて素顔なのであつた。それはこの集に收めた諸短篇について特に眞理なのであつて、同じく民話體の話法とはいつても、一應の知性で處理されてゐるトルストイ流の民話體と、そのやうな處理をことさら拒んでゐる觀のあるレスコーフの多彩な民話體とは、その本質に甚だしい差違がある。わたくしはこの翻譯にあつてわざと碎けた俗語體を使ふことに努めてみたが、それが成功してゐるか否かは大方の批判に俟つとして、決して伊達や物

すきでしたのでないことだけは諒解して頂きたいのである。

一九四九年二月 譯者しるす

邪 戀

譯者略歴

明治36年東京に生る 東京外語卒 譯書に「プ
ーシキン短篇集」ドストエフスキー「永遠の良
人」チエホフ「手帖」等あり

昭和24年2月25日印刷
昭和24年2月28日發行

譯者・神 西 清

發行者・東 井 三 代 次
奈良縣丹波市町川原城
會員番號A125015

印刷者・鈴木直樹
日本寫眞印刷株式會社
京都市中京區壬生花井町三

製本者・松尾榮次郎
京都市上京區橋本町千本車入
昭榮堂製本所

發行所・株式會社 養 德 社
本社 奈良縣丹波市町川原城
振替口座 京都25648
京都市中京區錦藥師通室町西入

〔定價 150 圓〕

19477

ロンゴス 吳茂一譯 **ダフニスとクロエー** 再版 ノート判一五六頁
定價一八〇圓

戀愛文學の古典として、その素朴にして香高き性愛描寫の抒情性は、現代文學に比を見ぬ美しさである。吳茂一氏の原典よりの名譯に添へて、ボナールの挿畫六葉、上質紙美裝本である。

シヤトーブリヤン 島中敏郎譯 **グラナダの悲歌** B6一六〇頁
定價一一〇圓

アタラ、ルネと共に清く美しい殉愛の物語としてフランス文學史に輝くシヤトーブリヤンの名作。

プーシキン 米川正夫譯 **オネーギン** B6二七〇頁
定價一六〇圓

天才プーシキンの代表的傑作、主人公と熱情の少女タチャナといふ典型的性格とその悲劇的戀愛を描いた不朽の小説。

モーパッサン 川口篤譯 **ミス・ハリエツト** B6一八〇頁
定價一〇〇圓

モーパッサン中篇傑作の一。信仰に生きる老嬢の心に芽生えた戀の悲慘を描いて深刻無比、他に短篇六つ。

シュテイフェル 本庄實譯 **荒野に生きる女** B6一四二頁
定價九〇圓

荒野に生きる男女の姿から突然ひらめき出る情熱は樹氷に光る胡陽の如く美とモラルと詩の世界を形成する。

終

